



▶西正寺梵鐘の銘文拓影  
◀西正寺梵鐘



## 太宰府の文化財

171

### 西正寺の梵鐘 (戦時供出)

江戸時代

先の大戦中、金属が不足した日本では必需品以外の金属を供出するよう命令が出て、家庭のナベ釜からお寺の仏像や鐘まで軍需用に提出されました。西正寺でもほかの寺々と同様、江戸時代に作られた梵鐘は供出の運命を辿りました。従って今回紹介する梵鐘はもう存在しないものですが、供出時に撮られた写真と銘文の拓本をもとに、供出で失われた多くの江戸時代の梵鐘の一端を探ってみましょう。

◀善導寺梵鐘



銘文から、この鐘は天明5年(1785)正月29日に作られたことが分かります。形は2匹の龍がデザインされた龍頭は和鐘の特徴ですが、鐘身に袈裟襷がないのは朝鮮鐘のデザインですから、この鐘は和鐘と朝鮮鐘を折衷した独自の意匠と思われれます。

この梵鐘を制作したのは博多の鋳物師山鹿次兵衛兼隆と同儀平兼賢です。山鹿氏は芦屋の山鹿に住んでいたため山鹿と称し、藩の御用釜師でした。兼隆は途中、兼重(包茂)と改名しますが、献上品の釜

やこの西正寺の梵鐘、太宰府天満宮の手水鉢や相輪櫓などを製造しています。兼賢は包賢とも書き、兼隆と一緒に前記の梵鐘や相輪櫓を造ったほか、天満宮の神牛像も彼の作品です。

また、西正寺の鐘とよく似た博多善導寺(中呉服町蓮池)の梵鐘を文化6年(1809)に作っています。この鐘は現存していますので、西正寺の梵鐘を復元する参考になります。大きさは総高170・5cm、底径83・8cm。撞座の蓮華文、疾走する2対の阿吽の獅子、16弁の菊花文、そして全体の意匠、写真を比べてみるとよく似ていることが、お分かりになると思います。

これらの梵鐘のデザインは山鹿氏の工房が作った独自の、また人気のあった意匠だったのではないかと想像されます。それにしても先人の文化や技術を教えてくれる品々が大砲の玉と消えたのは残念なことです。

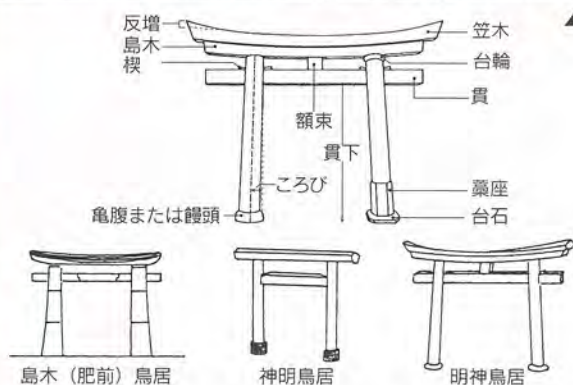
# 太宰府の文化財

## 鳥居 1

172



▲宝満山の一の鳥居



▲鳥居の部分名称と種類 (『大百科事典』平凡社、『神社』近藤出版社)、『図説歴史散歩事典』山川出版社から転載)

神聖な区域を表すために参道や境内の入口に立てられるのが鳥居です。形式の起源についても日本固有説のほか、アジアの類似施設との関連を説く説もあります。鳥居という語は、平安時代の『和名類聚抄』では「鷄栖」という字を当て、「伊呂波字類抄」では鳥の居る所だからといい、「華表」を鳥居と読ませるなど諸説あり、定説はありません。一つ考えられることは神域を外界から区別するしめ柱

(2本の柱の上にしめ縄を渡したもの)のようなものと門とが複合し、海外の様式の影響なども受け、現在の形式に落ち着いたのではないかということですが、  
主な鳥居の形式は図のとおりです。均整がとれて見えるのは地上の柱間内法と地面から貫の下までの寸法がほぼ等しく作られたものです。  
次に市内に立つ鳥居のいくつかを紹介しましょう。

### 宝満山の一の鳥居

高さ 7.1m  
延宝7年(1679)

市内で2番目に古く、江戸時代の初めに作られました。(一番古いのは太宰府天満宮心字池の手前に立つ鎌倉時代の鳥居ですが、これは平成元年の9月1日号で紹介済みです)この鳥居は宝満山の登山道の途中に立っています。形は明神鳥居で、花崗岩製です。全体の高さは約7mですが、貫の下までの高さは4.99mで、柱間内法は4.5m、均整がとれて見える法則に合っています。

鳥居の左右の柱に刻まれた銘文から、福岡藩主黒田光之が大檀那となり、宝満山の山伏であった平石坊弘有が勧進して建立したことが分かります。石工は大坂の西村弥平次。福岡藩第三代藩主の光之は父忠之と同じく敬神崇仏の念が強く、寺社に篤い保護を加え、所領を寄進したり、再建修築などを施しています。この鳥居も戦国の戦乱と江戸時代初めの火事で荒れてしまった宝満山の再興の一つとして建立されたのでしょう。  
平石坊弘有は宝満の山伏の中心として復興に手腕を発揮した人です。講堂を再建し、修行に必要な備品を揃え、祭を再興したということです。そしてこの鳥居のほか、中宮跡の崩れ落ちた鳥居、キャンブセンター奥の十三仏を刻んだ大岩に弘有の名が残っています。

# 太宰府の文化財

## 鳥居 2

◀太宰府天満宮参道の鳥居



173

### 太宰府天満宮参道の鳥居

高さ 7・04 m  
元禄9年（1696）

太宰府天満宮参道を上っていくと最初に立つ鳥居です。柱に刻まれた銘文から江戸時代の元禄9年に福岡藩第四代藩主黒田綱政によって建立されたことが分かります。

また昭和63年に参道整備のため解体された時、約400枚の銅銭が石材の合わせ目から出てきました。これは部材の間にできるすき間を埋める



▲元禄14年建立 県道際の鳥居

ために挟み込まれたものです。このようなやり方はよく行われたことなのですが、これほどたくさん詰められたのは珍しいそうです。

銅銭はほとんどが江戸時代初めの寛永13年（1636）から製造される寛永通宝で、他の数枚が中国から輸入した銭でした。鳥居建立に直接関係はありませんが、詰物の銅銭の種類や割合は、当時の銭の流通、引いては暮らしの一端を知る手がかりを与えてくれそうです。

### 太宰府天満宮本殿西北、県道際の鳥居

高さ 3・5 m  
元禄14年（1701）

もう一基、黒田綱政が建てた鳥居が天満宮にあります。

この鳥居は当初、現在の連歌屋の交差点の場所に建立されました。江戸時代に描かれた天満宮境内図に小鳥居と書かれている鳥居です。ついでながら、この絵図で大鳥居と

記されている鳥居が、前記の元禄9年建立の鳥居と思われるます。

連歌屋の鳥居は昭和の初めごろ、たぶん道路の途中に立つのは何かと不便だということになったのでしょう、現在の境内の西門の所に移され、そこも安住の地ではなく、間もなく二度目の移転をし、現在の場所に落ち着きました。貫の下までの高さは2・8m、柱間内法2・67mで参道の鳥居に比べると小さな鳥居です。

これらの鳥居は、黒田家初代よりの天満宮に対する崇敬、宗教政策の流れを受け継いで綱政が寄進したと思われます。他に天満宮には参道に明治28年博多や京都そして太宰府の住人たちが発起人となった鳥居と、明治45年伊藤傳右衛門が寄進した鳥居が建ち、心字池を越えた所に明治35年、千年大祭を記念して嘉穂郡三緒村（現在の飯塚市）の人が建立した鳥居があります。

# 太宰府の文化財

174

## 鳥居 3



▲竈門神社の鳥居



◀日吉神社の鳥居



▲衣掛天満宮の鳥居



▲関屋の鳥居

①②以外の市内にある江戸時代に建てられた鳥居を古い順に紹介します。

### 竈門神社の鳥居

高さ 4・29 m  
安永9年(1780)

竈門神社の参道の階段を上っていくと3番目にくぐる鳥居です。

今から200年以上前の安永9年11月に、内山村と原村の氏子たちが国家が太平であり、民が繁栄するようにと祈って建てたものです。

### 日吉神社の鳥居

高さ 3・41 m  
文化3年(1806)

お社は観世音寺の後ろの小高い丘の上にあります。鳥居は社殿に上っていく石段の手前に立っています。

柱の銘文から江戸時代後期の文化3年10月に吉鹿恵吉が発起人となり、観世音寺村の氏子たちが奉納したことが分かります。また観世音寺別當琳榮という銘も残り、日吉神社と観世音寺の関係、つまり日吉神社が観世音寺の鎮守社だということを教えています。

### 衣掛天満宮の鳥居

高さ 2・09 m  
文化9年(1812)

国分にある衣掛天満宮の鳥居です。文化9年8月に国分村の里人たちが浄財を募って建立したものです。貫下まで2m、柱間内法1・82mの小柄な鳥居です。

旧国道3号線の関屋交差点から西鉄都府楼前駅へ下っていく旧

### 関屋の鳥居

高さ 6・97 m  
文久2年(1862)

道に立っています。最近の道路拡幅で片側車線にだけ立つ形になりましたが、もとは太宰府天満宮へ参拝するさいふまいの道に立つ鳥居でした。江戸時代もう終わりそうな文久2年に、最後の藩主黒田斉博によって建てられました。

以上、市内に建つ鳥居を見ってきましたが、日ごろ何気なく見ている鳥居も、よく見るといろんな情報を秘めて百年二百年風雪に耐えてきたことが分かります。

# 太宰府の文化財

175

## 灯籠 1



▲真寂坊の石灯籠



▲日吉神社の石灯籠



▲関屋の石灯籠

鳥居の次は灯籠です。神社には常夜灯として寄進された石灯籠がよく建っており、市内にも江戸時代の灯籠がかなり残っています。

市内各神社と太宰府天満宮

境内を2回に分けてお話ししましょう。



▲宝満山の一の鳥居の石灯籠



▲竈門神社の永代常夜燈



▲衣掛天満宮の石灯籠

### 宝満山の一の鳥居の石灯籠 2基

文化11年(1814)5月第10代藩主黒田斉清が寄進した灯籠です。斉清の時代には

大きな災害が何度か起こり、領内の代表的神社で度々、祈禱が行われました。宝満山もその一つです。この灯籠寄進の動機は分かりませんが、以上のようなことが関係してい

るのかもしれない。

### 竈門神社の永代常夜燈

安永9年の鳥居の上方、本殿に向かって参道左側の1基です。これも文化11年3月に建てられています。

### 真寂坊の石灯籠

三条の「宮前」バス停から少し宇美の方へ行った所に点々と2基の石灯籠が立っています。砂岩らしい風化しやすい石なので、欠けた部分もあり

ますが、次のような文字が読めます。寛政12年(1800)

12月に宿坊真寂坊を通して、宗像郡津屋崎と田野村(現玄海町田野)の人が寄進したものです。

### 日吉神社の石灯籠

社殿に上っていく石段の下、向かって左の1基です。残った銘文から享保15年(1730)11月25日に筑後御原郡三沢村の平田氏が奉納したことが分かります。

### 衣掛天満宮の石灯籠

鳥居の前に1基あり、文化2年(1805)、上水城の若者たちが寄進しました。

### 関屋の石灯籠

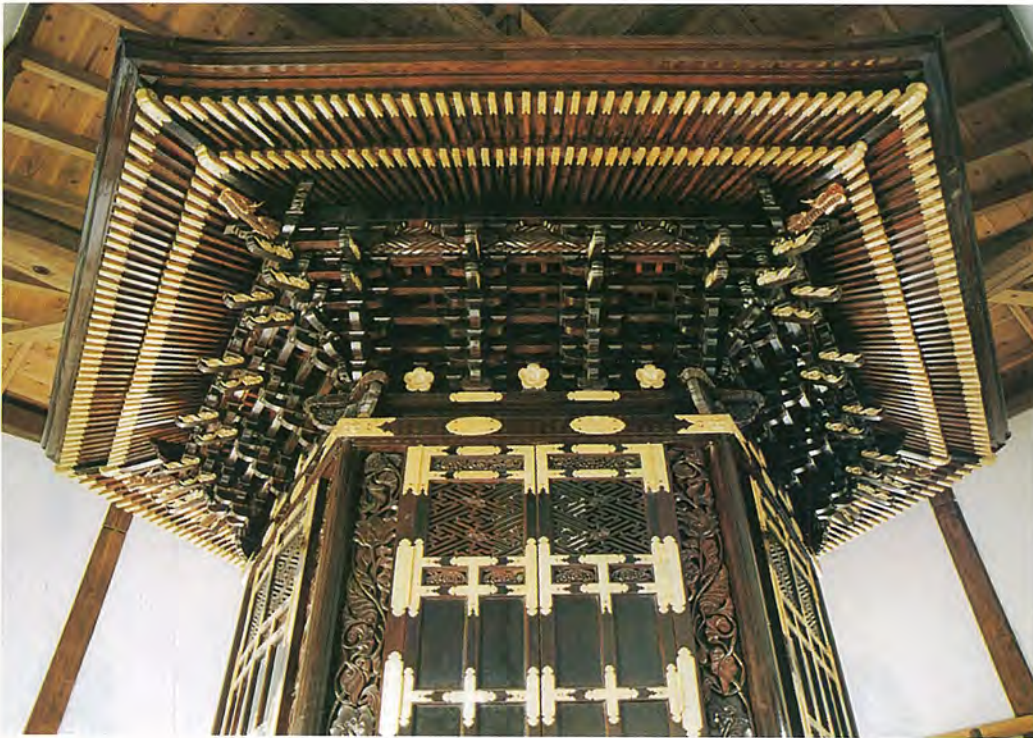
鳥居の前に立っていました。現在は道路拡張のため、少しずれて道路際に移されています。

享和2年(1802)、さいふまいるの道を照らす灯籠として寄進されました。棟梁木附重右衛門ほか、7〜8人の石工の名や、願主、寄進者として20人以上の人々の名が台石に刻まれています。この灯籠は灯明田もあり、前の戦争中までは毎夕、灯明がともされていたそうです。

# 太宰府の文化財

176

## 輪蔵 (県指定有形民俗文化財)



江戸時代  
一辺1・7mの六角形  
田主丸町伯東寺蔵

輪蔵とは回転式の經典を収蔵する装置で、八角形や六角形の書棚を造り、中心に軸を入れて回転させます。輪蔵を1回転すれば、中に納めてある一切経(大蔵経)の功德を得られると言われます。禅宗寺院を中心に、江戸時代には他の宗派も造るようになります。

さて、写真は田主丸町の伯東寺にある輪蔵です。それがどうして太宰府と関係があるのかといいますと、もとは太宰府天満宮にあったものだからです。そのいきさつは輪蔵の心柱に書き残されています。それによると、製作は享保



14年(1729)。漆塗りである所に金色の飾金具を打ち、全体に装飾性に富む美しい造りです。大工は山右近ほか1名の二人の山氏が中心になって造っています。

その輪蔵も明治初年の神仏分離令によって太宰府天満宮が寺(安楽寺)の機能を停止したため、仏像などと共に周辺の寺に移されていきます。一旦は佐賀の養父郡蔵上村(今の鳥栖市)西法寺に移築されますが、明治16年、千歳・守静というお坊さんの努力によって伯東寺に落ち着きます。そして輪蔵全体を納めるための土蔵造りの経蔵を作ってもらって現在に至っています。

この輪蔵は県内では2番目に古く、有形民俗文化財に指定されています。

▲納められた一切経  
ところで、これを造った大工山氏は、太宰府天満宮の江戸時代の諸堂社造営に関わった山氏の一党でしょう。また天満宮での輪蔵の所在場所は、江戸時代の地誌類の絵図によると、楼門の東南だったようです。

## 梵鐘

あけましておめでとうございます。やはりお正月になると暦のマジックなのか、気持ち新たに感じるものですね。

折しも今年(西暦2000年)は21世紀への序章を綴る年です。そして、辰年でもあります。雲を自在に操るといわれる龍にあやかると、不景気の暗雲を追い払い、上昇気流に乗りたいたいです。

私たち広報3人組も、皆さんに楽しく読んでいただける広報を目指して、心機一転がんばります。今年もどうぞよろしくお願いたします。



カット：渡辺治郎

印刷／四ヶ所印刷所

太宰府市役所：〒818-0198 太宰府市観世音寺一丁目1番1号 ☎(921)2121 FAX (921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。



# 太宰府の文化財

177

## 灯籠 2



▲文政13年の灯籠



▲寛永2年の灯籠



▲天保13年の灯籠



▲享和2年の灯籠

太宰府天満宮境内の石灯籠を紹介いたします。天満宮境内に建つ石灯籠の多くは江戸時代に寄進されたものです。全部は無理ですので、その中のいくつかを取り上げました。参道から境内に入つてすぐ

**文政13年(1830)の灯籠**

文化9年(1812)の灯籠  
太鼓橋のたもととの両側に立っていて、長崎の島原に住む牧瀬彦八郎が延寿王院を通じて奉納したものです。

**寛永2年(1625)の灯籠**

寛政5年(1793)の灯籠  
余香殿の入口に立つ2基の大きな灯籠です。長門国の人たちが寄進しています。

**天保13年(1842)の灯籠**

延宝8年(1680)の灯籠  
江戸後期の灯籠が多い中でこれは江戸前期に、太宰府の古川新三郎と庄三郎が寄進したものです。本殿の裏に2基並んで立っています。

**享和2年(1802)の灯籠**

以上、天満宮境内にある40基を超える江戸時代の灯籠のごく一部を紹介しました。江戸時代後半を中心に京都、讃岐、伊予、石見、備後、周防、長門、沓岐、対馬、長崎、平戸、筑後そして博多と各地の人々が宿坊であった社家を通して常夜燈を寄進しており、天神信仰の広がりを感じます。

左手にある公衆電話ボックスの陰に隠れるように立っている灯籠です。京都の天神講の人々が延寿王院を取り次ぎに寄進したものです。下の台石には寄進した人々の名も刻まれています。

基の灯籠です。回廊の中にある黒田長政寄進の慶長13年(1608)の灯籠(県指定文化財)に次ぐ古さで、これは2代藩主忠之の寄進です。大きさは型が少し違っているのは後に補修されたためと思われる。

吉が十境坊良範を取り次ぎに寄進。石工として有吉重兵衛の名が刻まれています。1基は余香殿の前庭に、もう1基は青銅麒麟の後に立っています。

石州つまり石見国(島根県)鹿足郡の藤井姓を中心とした10人の人たちが寄進したものです。



▲文化9年の灯籠



▲寛政5年の灯籠



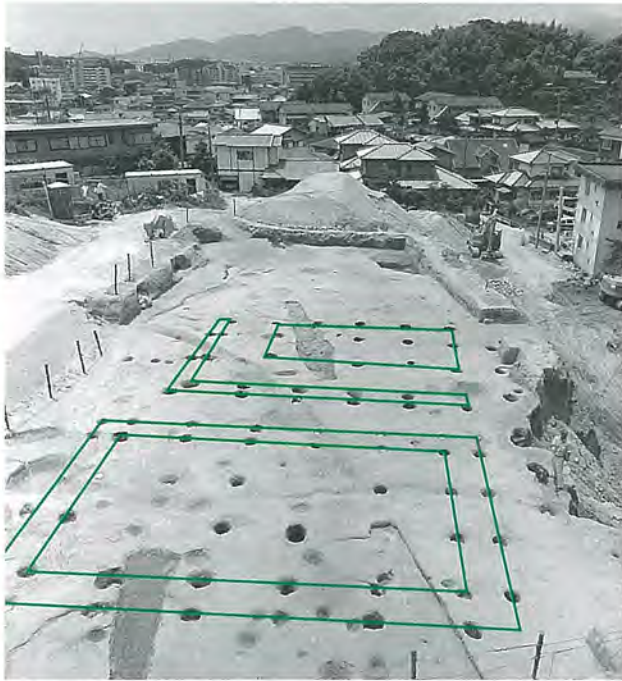
▲延宝8年の灯籠

# 太宰府の文化財

178

## 横岳崇福寺跡

鎌倉時代から戦国時代 調査地 白川



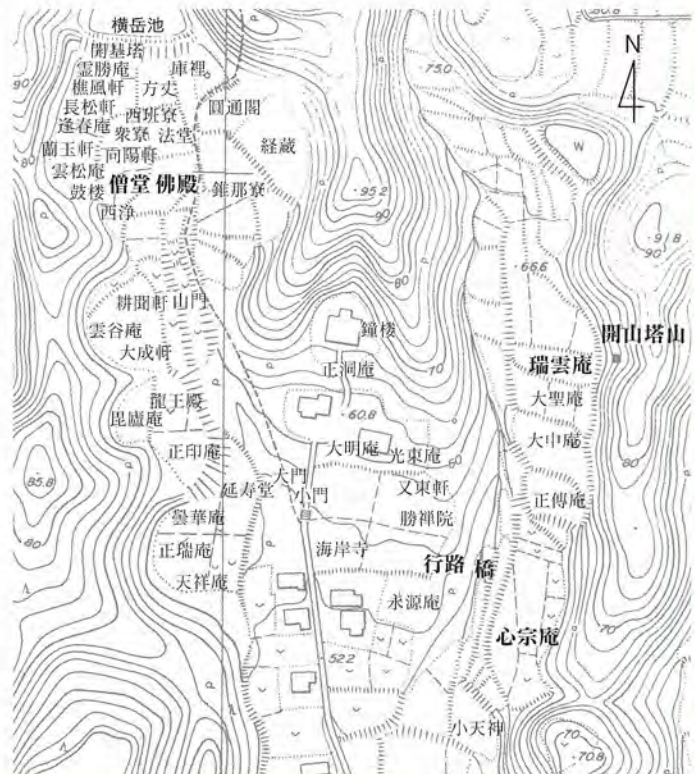
▲掘立柱建物群（遺跡の北側から南方を望む）

白川区の奥から観世団地にかけて四王寺山の山すそに、かつて崇福寺というお寺が建っていました。鎌倉時代の13世紀半ば、臨済宗のお寺として開かれ、戦国時代、兵火に遭って消失し、箱崎松原（現

在の博多区千代）に移転再興されるまで約350年間のことでした。そのため寺域跡地は昭和42年から開発に伴い、発掘や試掘調査を行ってきました。その結果、現在の観世団地の一

画に仏殿と僧堂の跡と考えられる礎石建物が見つかりました。また東側の山際に立つ開山大応国師の塔に中心が合うので、開山の塔頭瑞雲庵かと推定される建物跡も出土しました。

そして今回、推定瑞雲庵の南側一帯を宅地開発に伴って発掘調査したところ、調査区の南側で4時期にわたって建物や扉・井戸の跡が見つかりました。中でも一番上の面から出土した掘立柱の建物の一つは、東西12・05m、南北7・8mの、周囲にぐるりと縁側が付く大きな建物でした（写真①）。この建物がいつの時代のものか、まだはつきりしませんが、焼けた物も混じる土は、天正14年（1586）の兵火の可能性が考えられています。ところでこの場所が何だっ



旧地形図での伽藍推定図

たか、仏殿や瑞雲庵を推定した時のように『太宰府横岳山諸伽藍図』（江戸時代初めの元和4年の図の写し）と比較検討してみました。瑞雲庵の南であること、伽藍図に記された川と思われる南北の2本線、それをまたぐ橋と行路の文字を現在の地形から推測すると、今も小道があり、橋を渡って崇福寺別院（瑞雲庵の跡）へ行くようになっている

そのルートに当てはまるのではないかと考えられるのです。今回調査した場所は、橋より南に位置し、伽藍図では橋より南には心宗庵という塔頭の名だけが書かれています。このことから出土した建物は心宗庵の可能性が高いと考えられています。少しずつ少しずつ、霧の中から崇福寺が姿を現すようです。



# 太宰府の文化財

179

## 水城跡出土の瓦窯

奈良時代 国分一丁目所在

水城跡の太宰府側の裾部の田圃から瓦を焼いた窯の跡2基が見つかりました。

平窯という形で九州では2例目という珍しいものです。その構造は山腹や丘陵を利用してトンネル状の穴を掘り、

窯にするのですが、床面は平坦に作ります。

ここでもう一つの窯の形で

ある登窯と比較すると、平窯の構造がもつとはつきりする

と思います。

登窯も同様に丘陵斜面を利



▶瓦窯の発掘状況（手前が焚口で、奥の方が焼成室です）

用してトンネルを掘りますが、この窯は床面が上り傾斜に掘られています。丘陵斜面を上るトンネル構造なので登窯なのです。日本の瓦窯の初期のものはこの登窯形式です。それが7世紀の終わりの藤原宮造営ごろから平窯が出現し、次第に平窯の方が主流になっていきます。

さてもう一度、水城の瓦窯のことに戻りましょう。窯の構造は薪を投げ込む焚口、瓦を並べて焼く焼成室、焼成室には炎が走る道を作るために再利用の瓦と粘土で造った台（分焰牀）を並べ、焼成室の入口には分焰柱を立てています。残念ながら、窯の天井も側壁も、製品の瓦も後の時代に削られたのか、発掘した時にはありませんでした。

すると、だいたい8世紀の半ば、つまり奈良時代の中ごろに築かれた窯と考えられます。

また構造的に平窯で分焰牀を持つようになるのは現在分かっているものでは8世紀の半ばの窯くらいからだそうで、ということは水城の瓦窯も分焰牀があるので8世紀半ば以前にはさかのほらないことになりそうです。つまり平窯の構造からも水城の窯は8世紀半ば、奈良時代中ごろ以降の窯ということが証明されます。

ではこの瓦窯は何のため築かれたのでしょうか。調べてみると『続日本紀』という史書に天平神護元年（765）に大宰少貳采女朝臣浄庭を修理水城專知官に任命するという記事があります。

つまり水城の修理が行われたのでしよう。その時瓦が必要になり、焼くための窯が造られたのではないのでしょうか。少なくとも2基の瓦窯があるのですから、かなりたくさん瓦が焼かれたと思われるます。

東西の門や警備のための建物などの屋根瓦用だったのでしょうか。

水城の修理は、そのころ続いてきた朝鮮半島の新羅との緊張関係が背景と考えられています。664年に築造されて100年が過ぎたことも理由でしようか。

ところで修理水城專知官の采女朝臣浄庭はどんな人かというところ、彼は都の官人ですが天平宝字7年（763）9月に豊後守に任命されて九州に赴任。そして翌年には大宰少貳に、続いて半年後、修理專知官に任命されました。

水城の瓦窯は、中央で始まった平窯の技術がいつごろ伝わったのか、どのようなきっかけで伝わるのか、水城の修理が具体的にどのようなものであったかなどを考えるのに大きなヒントを与える発見と言えましよう。

### 速報展のお知らせ

3月29日(水)～4月17日(月)

文化ふれあい館

# 太宰府の文化財

180

## 光明寺の頂相

江戸時代 光明寺蔵

禅宗のお寺には頂相と呼ばれる肖像画が所蔵されていることが多いですが、光明寺にも江戸時代に描かれた頂相がいくつか伝わっています。

頂相とは「無見の頂相」という、仏の頭上の肉髻の相を指す言葉に由来していますが、それが転じて禅僧の彫像や画像のことを指すようになりま

す。無見の頂相のようになかなか見ることが出来ないということからでしょうか。

禅宗では教え(法)は師から弟子へ相伝していくものであり、弟子が悟りを開く道に熟達すると、その証に師は自贊の肖像画を与え、法の後継者として認めました。また高僧が亡くなると、葬礼仏事の折に使うために作られる故人の肖像も頂相と言います。このように禅宗では法脈相承の証拠として、また追善の対象として頂相は重要なものでした。画像は写真のもそうですが次のような形式に基づいて描かれるのが普通でした。法被

と呼ばれる金襴などの布を掛けた椅子(曲家)の上に法衣・袈裟を着て威儀を正して座禅し、手には扨子、竹篋という説法の際の法具を持ち、椅子の前には杵を乗せた足台(踏床)が置かれています。

### 鉄牛円心像

承天寺の2世で光明寺の開山である鉄牛は菅原氏の出身で聖一國師の70人の弟子の中でも傑出し、承天寺・光明寺以外にも横岳崇福寺に住し、肥前杵島郡福泉寺を開いたと東福寺第258世の藍溪光瑄の贊には書かれています。この像は承天寺にある鉄牛の頂相を元にしたといわれます。贊を書いた藍溪光瑄は享保19年(1734)対馬の以酌



▲鉄舟円般像  
紙本着色 掛幅装  
105.2×51.2センチ

庵の住職を任期満了に伴って帰京する途中、承天寺に立ち寄っています。

### 仏鑑禅師(無準師範)像

聖一國師の師仏鑑禅師の像。聖一國師が無準の自贊を得て中国から持ち帰り、京都東福寺に置いた画像を、崇福寺寛琳が帰郷する際に写したものです。贊文は東福寺第254世石霜竜菖が書いています。

鉄舟は承天寺第104世で黒田如水と関係があり、戦国の戦乱で荒れた承天寺を再興。また光明寺の末寺本願寺の開山なので、これは本願寺の開山像として制作されたのかもしれないということ。贊は前述の石霜竜菖です。石霜も享保3年(1718)対馬以酌庵からの帰途、聖一國師の塔を拝するため、承天寺に寄っています。



▲鉄牛円心像 絹本着色  
掛幅装 101.5×47.3cm  
元文3年(1738)



▲仏鑑禅師(無準師範)像  
紙本着色 掛幅装  
100.0×48.0センチ

絵師は福岡藩の御用絵師上田家の一人主常。彼は江戸狩野派の中橋家で修業、筑前の国絵図制作にも参加しています。承天寺には上田主治画の頂相も残り、上田家は承天寺派の頂相作製に関わったことが分かります。